

東北大学医学部保健学科

同窓会新聞

3月11日14時46分

東日本大震災発生

3・11の東日本大震災では、沢山の方々が被害に遭われました。最初に、この紙面をお借りして、亡くなった方々のご冥福をお祈り致します。

今回の大地震、地震の規模を示すマグニチュードは9.0でした。これは、1995年に発生した兵庫県南部地震の約1450倍のエネルギーの地震であり、世界でもスマトラ島沖地震(2004年)以来の規模で、1900年以降4番目に大きな巨大地震となりました。

地震により大規模な津波も発生しました。最大で海岸から6km内陸まで浸水、岩手県三陸南部、宮城県、福島県浜通り北部では津波の高さが8~9mに達するなど、震源域に近い東北地方の太平洋岸では、高い津波が甚大な被害をもたらしました。津波、液状化、建造物倒壊など、東北の岩手県、宮城県、福島県の3県、関東の茨城県、千葉県の2県を中心とした被害は大きく、この地震による死者・行方不明者は約2万人にも上りました。一方、地震と津波により福島第一原子力発電所で事故が発生し、放射性物質漏れによる汚染などが問題になっています。

第7号同窓会新聞は、震災特集号と称して、震災関連の記事を中心にお送り致します。

発行人 進藤千代彦
発行所 東北大学医学部保健学科
仙台市青葉区星陵町2の1
編集人 東北大学医学部保健学科同窓会新聞
編集委員会
編集委員 高根侑美

新たな決意とともに

保健学専攻小児看護学分野
塩飽 仁

本来なら3月25日(金)は東北大学の学位記授与式(卒業式)が行われる日でした。保健学科の4期生も晴れ晴れと大学を後にして新たな門出を迎えるはずでした。

震災から数日後には平成22年度の卒業式が中止が決まり、謝恩会の中にも決定しました。学生の安否確認がおおよそ終わる頃に在仙の4年生の有志が形だけでも卒業式をしようとして動き始めました。

教職員も避難したり出勤すら困難な状況でしたが、学生の希望を叶えようと段取りを進め、震災からちょうど2週間後、そして本来卒業式が行われる予定であった3月25日に急遽卒業式を執り行うことになりました。

電気は復旧していたものの水道やガスが未だ復旧しておらず、暖房が全くない環境でしたが、3月25日(金)10時から保健学科棟大講義室で平成22年度東北大学医学部保健学科卒業式が挙行されました。

出席したのは学生のおよそ4割、教員の6割ほどでした。教務係長の司会のもと、医学部長の挨拶、卒業

証書授与、専攻主任の挨拶、保健学科長の挨拶、卒業生答辞と次第が進み滞りなく式は終了しました。終了後には学生から教員への花束贈呈や記念撮影が行われ、しばし華やいだ雰囲気でした。

正規の学位記もなく、来賓の長い挨拶もなく、晴れ着を着た者もおらず、寒い講義室での式でしたが、誰にとっても忘れることのできない式となりました。何よりも涙のない、笑顔だけの卒業式であったことが喜ばしく皆とても素敵でした。この機会に志を持ち新たな決意を心に社会に旅立つために自ら式を企画した卒業生と、様々な医療支援に奔走しつつも学生の思いを支えることができた教職員の成果だったからこそ感動もひとしおであったと感じました。

本稿の最後に保健学科長の吉沢豊子先生の挨拶を引用いたします。
「大きく揺れた星陵キャンパスにも、春は確実に来ています。菊水池のほとりの紅梅も、こぶしの花もすっかり咲いていました。皆さんの旅立ちを見守っていたものと信じています。」

震災から2週間が過ぎましたが、私たちはこの2週間で『あなたたちは一人じゃない、Japan We are with you. You are not alone』という言葉聞き、目にしていきます。多くの皆さんがこの「人とのつながり」を意味する言葉に勇気づけられていると思います。私たちは、いろいろな意味でつながっています。大学に入ると、友達とのつながり、教員や皆さん

んをサポートしている人とのつながり、そして、新しい地での、新しいつながりとその輪は広がっていくのだと思います。あらためて、「人とのつながり」を喜び、互いに支え合い、輝きあいながら真の人生を歩むことができる社会の実現に貢献されたいことを祈念し、お祝いの言葉といえます。」

支援事業の紹介

3・11の震災後、保健学科所属の先生方や学生達は多くの支援事業に参加しました。その中で、今回4名の方にお話しし、記事を作成していただきましたので、紹介します。

大地震

そのとき看護学専攻では

看護学専攻 主任
川原礼子

みなさん！あの地震のとき、どこにおりました？

もし通常の授業中に起こっていたら、私たち教員は在校生を果たして守り切れていたでしょうか。5カ月経って日常のおおよそを取り戻した今、ふとそんな思いが脳裏をよぎります。その時、私はたまたま車に一人でいて、たまたま周囲に人影が見当たらなかった状況で、本当に恐ろしい思いをしました。血圧は目いっぱい上昇していったでしょうから、ショック死を起こさなかった我が肉体に感謝、感謝です。その時、校舎にいた教員たちは外に出てキャンパス内の避難場所に集まったとのことですが、おそらく恐怖や不安で誰もが青ざめていたことでしょう。

局を介して看護学コースの教員や学生に安全確保と大病院のボランティアを呼びかけました。
吉沢豊子保健学科長から学生全員の無事が報告されたのは、地震から5日後のことでした。私は思わず子供のように「わー」と手を叩いてしまいました。それが、それほど教員にとっては気が重くない問題でした。ここでは運命の神に感謝しました。

大学としては直ちに学生および教職員の安否確認を行いました。職員の中には、避難所暮らしを余儀なくされたものもありました。ライフラインを断たれ、生きるための戦いをしている私たちに被災者支援ニーズは怒涛のように押し掛けてきました。とりわけヘリコプター等で運ばれてくる被災者への対応で危機的状況にある大病院看護部支援は、緊急を要するものであり、私はラジオ

さて、学部の4年生の3月25日に予定されていた卒業式および謝恩会は中止になり、別れの挨拶の機会は永久に失われることになったので、私は看護学専攻が学生との連絡に使っていた電子掲示板を介して、「みなさんの人生に幸あれ！」と最後のメッセージを送りました。3年生に對しては「あの幸せな日々を再び我らの手に！」であり、今振り返ると、何やら気恥ずかしい文章のように思えますが、しばらくぶりにビールを手にして気分が少し高揚していたような気がします。まもなく、卒業式が予定されていた日になりましたが、突如4年生有志がどっと押し寄せ、



緊急の卒業式を施行するという展開になり、驚きました。普段の慌ただしい卒業式でしたが、みな、生きていたことの幸せをかみしめた一時でした。塩飽教授のほうの写真に刻まれておりますように、卒業生たちはとびつきの笑顔を残し、社会や大学院という、もう一つの試練の場に旅立っていきましたが、みなさん元気にやっていますか？

医学系研究科および大病院の対策本部は、いずれも 24 時間態勢で震災への対応を行いました。地震直後、連日行われた災害対策本部打ち合わせのあと、看護学コースの教員はその場に残り、臨時の教員会議をもって、組織的な支援活動に臨みました。

震災復興支援活動は、学生への支援を除くと、「大病院支援」「被曝サーベイ支援」「避難所支援」「妊産婦支援」「地域ケア支援」「保健師活動支援」などでした。「大病院支援」については、入院となった患者さんや震災に遭遇して興奮状態にあった患者さんに食事、清潔、排泄、移動といった多様なケアの提供をしました。たぐさんの学生ボランティアも活躍しました。「被曝サーベイ支援」は、被曝の疑いのある住民が問診表に記入する際のお手伝いをさせていただきました。「避難所支援」は、大病院の医療チームに加わり健康調査、健康診査、および医療支援を行いました。また、市内の避難所に教員同士あるいは教員と学生がグループで訪問し、健康アセスメントとその対応、清潔ケアなどの支援を行いました。「妊産婦支援」は、被災して自身のクレンジングで業務ができなかった助産師を、必要とする施設へ紹介しました。また、交通手段を断たれて妊婦健診に行けない妊婦を、助産師が避

難所や自宅に訪問する際、必要とされる器具の貸し出し等を手配しました。「地域ケア支援」は、主として被災した高齢者支援で、大勢の要介護高齢者がケアハウスに避難していたために、その介護を学生とともに泊まり込みで行いました。また、医学部に届けられた支援物資を被災者が多く運ばれた病院や市内の老人施設や訪問看護ステーション室に届けました。「保健師活動支援」は、保健師に同行して被災した市を全戸訪問して安否確認し、健康状態や介護支援の状態をチェックしました。また、保健所の機能が失われた市の保健システム再建のため、保健師業務のスーパーバイズを行いました。

雑誌(看護教育 52(7)、540-550、2011)にも投稿したように、私たちは自らが被災しながら被災者支援に動かしむという、これまでの人生を問われる局面に遭遇したわけですが、いま振り返ると、どこに出しても恥ずかしくない活動内容だったと思うのは、私だけではないでしょう。まだ続けられている支援活動もあるとは思いますが、みなさま、本当にお疲れ様でした。ひとまず、ねぎらいの言葉を言わせてくださいませ。

余談ですが、私は「聞くも涙、語るも涙」の世界に入っております。あろうことか、昨年、地震保険を解約していたのです！保険料があまりにも高いので、一回くらいお休みしちゃえと思ったのが運のつきでした。先日、大工さんが持ってきた修理の見積書を見て、思わず天を仰ぎました。定年が近く、「さあ〜て遊ぶぞ」と思っていたのですが、まだまだ働かなくては・・・
このところ、授業中に学生の顔を

見ると、なんだか、たくましくなったような印象を受けます。他の教員もそのようなことを呟いていました。きつと、この震災で誰もがなんらかの形で苦勞を背負い、それを乗り越えつつあるからでしょう。昔、中学校で学んだ格言、「人生は学校である。そこでは幸福よりも不幸のほうがよい教師である」が思い出されます。先日、インターネットで調べたらロシアの文学者フリードマンによるものでした。震災直後、この言葉が思い浮かびましたが、口にするには状況があまりにも過酷でした。確かに震災があつたからこそ、悟ったこともたくさんあるように思えます。

みなさん、この試練に耐えて、一層、飛躍していきましょう！



福島原発一時帰宅住民の被曝線量サーベイに参加して

放射線技術科学専攻 助教 細貝良行

3・11の東日本大震災では沢山の方々が被害に遭いました。最初にこの紙面をお借りして、亡くなった方々のご冥福をお祈りすると共に、一刻も早い復旧・復興を祈念いたします。

自分も被災者の一人ではありませんが、海岸沿いの方々や福島原発近辺の方々には比べたら、被災者と言うにはほど遠い状況です。そのような中、気仙沼に2回ほど個人的にボランティアで行って来ました。気仙沼には友人が住んでいたこともあり、震災前には何度も行ったことがありましたが、家族で海水浴に大島まで行ったこともありましたが、震災後の状況を目のあたりにし、泣きそうになったことを覚えています。この度のボランティアの方々の努力は、ニュース等の報道でも解るように多大なものがあります。少しの力でも沢山集まるとものすごいことが出来るという証明になったものと思っております。

しかしながら、完全に復旧・復興をするためには、政治を含めた大きな力で一気に行く必要があります。一刻も早く国としての方針を出していただき、きちんとした補助が出来る体制になればと思っております。

実は震災直後、すなわち、学校を含め自宅や街中の電力・水道等のライフラインが全く回復していない状況において、東北大学病院では福島県南相馬市などから避難してくる方々の被曝に対するサーベイを行っていました。当時は福島県から避難してくる人々は放射線に汚染されているため、周囲の人に汚染を遷すところであり、現に自治体によっては福島県からの避難民の受け入れを拒否している自治体もあったのは、皆さんご存じの通りです。福島県から避難してくる時には、放射線による被曝が無いことを証明する「証明書」が必要とのことで、証明書が無い場合には、避難所に受け入れてもらえないというとても悲しい状況が

ありました。その証明書を発行するために、東北大学病院でサーベイを行っていたため、その補助として当学の教官も担当していました。当時はガソリンを購入出来なかったため、通勤手段を確保するのが難しく、車で通勤していた自分も含めて数人の教官は泊まり込みでサーベイを実施していました。一日あたり10〜20人程度の避難者が家族単位で来て、時には犬や猫、車等も測定しました。当時は除染の基準をかなり低線量に設定していたので、衣服や靴等が保管対象となった避難民の方々が結構いました。被曝に関しては、衣服を脱ぐことで全ての避難者が基準線量以下になり、安心して帰っていただけるとの注意が対応していましたが、最初の頃はマスクの取手が結構多く、それに対する過剰な反応が人々に浸透してしまい、結果として現在に至っているものと思えます。陸前高田の松林の松を焼却することにによる被曝や、福島県で造られた橋桁を使用することによる被曝等に対する反応は、あまりにも過剰すぎて悲しみを乗り越えても滑稽に見えてしまうのは、自分だけではないものと思えます。

このような中、福島県の原発周辺の立ち入り禁止区域から、一時的に避難している住民の一時帰宅に対する被曝線量測定の一部を各国立大学から派遣された教員で行うように依頼され、自分も含め当学の放射線専攻の先生方が多数参加されました。自分もトータルで10回程度参加しました。自分が最初に行ったときが一時帰宅の実施が始まる初日だったので、一時帰宅する住民の数よりもスタッフやマスクの数の数の方が多かったのを覚えております。その場

で対応するスタッフも、良くテレビに出てくる原子力保安員の方や内閣府、厚労省、文科省、各地域の電力社員等沢山いました。マスクも遠慮無く取材をされていて、正直、一時帰宅者のプライバシーはほとんど無い状況でした。我々サーベイ班も取材を受けましたが、取材を受ける場合には、文科省の担当者に担当してもらおうように指示されていたと思います。また、住民の方々も非常に緊迫した状況で、皆さんピリピリして準備をされていました。本来は電力各社の対応で十分可能であると思われましたが、住民の方々の心情を緩和する役目として、各大学関係者が参加することになったのであろうと言ったことは何となく察することが出来たので、出来るだけ住民の方々に負担がかからないよう、細心の注意を払って対応することを心がけました。始まった当初は原発からの距離が遠い地域から一時帰宅が開始されましたので、住民の方々が持つて行った線量計による放射線はほとんど検出されませんでした。しかしながら、検出されないのは良いのですが、「検出されないのなら、なぜ自宅に帰ることが出来ないのか？」という質問が住民から出て、対応に苦慮したことや「東京の電力を福島でつくっているのに、トラブルの時には文句しか言わない・・・」という言葉がどうも印象に残っています。その後、幾度か参加することになりますが、回を重ねるたびにマスクも減少し、最後の方は全然マスクがない状況となりました。住民に対する取材は基本的に出来ないことになっていくと思いますが、このマスクの切り替えの早さに対し、騒ぎ立てるのが良くないと思ったのか、世の中が

飽きてしまったのか解りませんが、正直腑に落ちない面を覚えております。一時帰宅が始まってしばらくすると原発に最も近い地域の方々の帰宅が始まり、被曝線量がそれなりに大きな値となって避難所に戻ってくる方が多くなってきました。大きな値と言っても医療被曝から見ればそれほどほどの値ではありませんが、その地域で一年間生活したら、現在国で指定している基準線量を超えてしまうような値となってしまう可能性がある方もいたものと思います。

住民の方々は様々なものを自宅から持ち帰っておりましたが、一番多いのは家族の記憶であろうアルバムや賞状などでした。また、住居が泥棒の被害に遭われた方々、飼っていたペットがいなくなっていた方々、ペットが死んでしまっていた方々もいました。これらの方々の心情は本当に察するに余りません。自宅を迫られ帰るに帰れない状況、仕事、家庭、故郷等の環境が全くそれまでと異なった状況の中で生活しなければならぬ方々のお気持ちを少しでも察することが出来ればと思っております。

先日、テレビのニュースで沖縄の普天間基地問題が取り上げられていました。とてもナーバスな問題であり、自分も本土に住んでいるので同情するようなどきことを言える立場ではありません。国がきちんと解決してくれることを切に思っています。そのニュースの中でキャスターが「本土の平和を沖縄の人々が命をかけて守っている」ということを言っていました。自分もその通りであると思います。それと同時に「東京の電力を福島でつくっているのに、トランプの時には文句しか言わない・・・」と言った福島の一時帰宅者の言葉が重なってしまいます。最近の全国ニュースで取り上げられるのは関東近辺の

ホットスポットの話ばかりです。「一時間あたり2μシーベルト検出された場所がありました。」「こちらでは1.5μシーベルト検出されました。・・・」国として早急に対応してもらわないと心配で歩けません。きちんとした線量計で測定しているのかどうかは解りませんが、検出された場所にずっと留まっていなければならぬ状況なのかどうかも解りませんが、いずれにしても線量計の値が数値として把握出来、隣よりも倍の値になっているとしたら、気持ちの良いものではありません。何らかの対応をする必要があるのかもしれない。それらは自分の家族を守るために必要な処理なのかもしれません。非常にナーバスな問題ですので、これらに対し肯定も否定もしません。でも、それらを考えると同時に一時帰宅を余儀なくされている避難民の方々のことも少しも考えていただければと思っております。同窓会新聞の記事ですので、これをご覧になるのは同窓生の方々だと思います。当然、それらの方々の中には実際に福島に住んでいて、直接的被害に遭われている方も沢山いると思えます。でも、もしそうではない方が読んでるのであれば、もう一度避難民の方々の心情を察していただければと思っております。



写真上：防護衣を着用する住民たち



写真上：住民の前で謝罪と立入り前の説明をする東京電力

写真右下：ポータブル線量計の受け渡しの様子
写真左下：サーベイの準備をしている千田先生



今回は一時帰宅のサーベイに関する記事を担当しましたが、乱筆・乱文等問題がある部分に関しては、あくまでも個人的見解として捉えていただければと思えます。原発関連の問題だけではなく、津波による被害に関しても様々ありますが、今回の趣旨とは離れてしましますので、別の機会とさせていただくことをご理解ください。最後になりますが、一時帰宅のサーベイを行ったときの写真を何枚か載せておきます。状況が少しでも皆様に伝われば幸いですと思っております。

震災後の支援活動を通して

保健学専攻博士後期課程1年 清水 恵

3月11日に起きた大震災：翌日、翌々日こそ私自身混乱していましたが、身の回りの状況が落ち着いてきたところで、看護師の免許のある自分には何かできることがあるはずだと思えました。そんな時、高次機能障害学分野の先生が中心となり、神戸から医療物資を運んできた看護師二人と石巻に行くのに行きする看護師を探しているという情報聞き、私がそれに同行することとなりました。その日の夜は、石巻赤十字病院で過ごさせてもらい、その次の日に避難所を数ヶ所と孤立していた病院へ行きました。その病院で薬品などの物資の搬入などにテキパキと対応してくださった薬剤師さんが、最後に、「このスタッフはみんな誰かを亡くしたり見つかってなかったりで泣きながらですけど頑張ってます。私の家族も生き延びたのは私だけで」と涙を流したことが今でも忘れられません。自分自身も、患者さんのために休む間もなく働かなければいけない人がいることに、言いようのないショックを受けました。何も出来ない自分が悲しかったです。

でも、それでも何かをしなければいけないという強い思いが湧いてきました。幸い、私の所属している研究室の教員は、健康と安全に気を付けた上で自分の思うように動くことを応援してくれました。そのため、その後も、避難所へ行ったり、保健師の活動の手伝いをしたりと動くことができました。

石巻での保健師の手伝いでは、最初は、現地の保健師さんに代わって何かをしてあげたいというおこがましい考えを持っていましたが、それは間違いで、私の役割は、現地の保健師さんが

この状況に対処するために影ながら支えることだということに気づき、そのような存在となるように心掛けました。ただ、石巻から帰るときには、少しは人の役に立てたのかもしれないという思いと、ほかに何もできない無力感が常にありました。また、仙台へ帰って明るい場所でご飯を食べ休むことが後ろめたく、あんなに大変な状況の人たちがいるのに自分は休んでいいのか、仙台にいて楽しい思いをして笑ってはいけない気がしてつらい気持ちが続き、周囲に迷惑をかけることもありました。

今思うと、工夫したり行動力があればほかに何かもって出来ることがあったのではないかと、と思います。この支援活動を通して、被災地の人を支えるために自分の力のできる最良の役割とはなにか、被災地に行くことでの自分自身の心へのダメージにどう対処するか、などボランティアをすることの難しさを知りました。そして、被災地にずっと留まり支援を続ける人々や、世界の戦場などでボランティアを行う人々の素晴らしさ、強さを改めて感じました。

BBT震災

ボランティアを通して

検査技術科学専攻4年 田仲宏充、外山真彦、中村生

この度の東日本大震災で被害を受けた方々に心よりお見舞い申し上げます。私たちは仙台市内にいるときに地震が発生し、電気・ガス・水道などの供給が止まり、スーパーなどのお店もその殆どが閉店してしまっていました。しばらくの間、不便な生活を送らなければなりません。しかし、ラジオや避難所に貼り出された新聞から津波の被害にあっ

た地域の状況を見て、私たちとは比べものにならない程の被害を受け、苦しい生活を強いられる人が大勢いることを知りました。仙台市内の機能が次第に回復していても、これらの地域では殆ど回復していない状況でした。丁度そのころ、被災地でのボランティアを行うサークルが活動を始めたため、私たちも被災地で何か役に立てることをできないかと思いい、そのサークルに参加して東松島市、亘町、山元町に行きました。サークルの参加者がとても多く、被災地の役所にも他の県からの方々が数多く参加していても驚きました。さらに、実際に自分の目で見る被災地の様子は、何度もテレビで見ているのにも関わらず大きな衝撃を受けました。

私たちはいくつかの活動を行いました。一つは、道路やイチゴ農家のハウス、民家の庭などに溜まった汚泥を掻き出す作業です。水分や油などを含んだ泥は非常に重く、途中で雨が降りだしたりもしたので、カッパを着ながら作業をしなければならず大変なものでした。10人程度が協力しても、一日かけて道路だと30〜40mくらい、民家だと一軒、イチゴ農家だとハウスの1/4程度しか行うことができません。泥の厚さは5cm程度だったので、これ以上には厚い泥に覆われたところの作業を考えると、いかに多くの時間と人手が必要なのかを実感しました。また、腐敗臭や粉塵、化学物質、ガラスの破片など作業を行う上で様々な障害があるため、手袋、マスク、ゴーグルは必須です。しかしながら、暑い、蒸れるなどの理由で外したまま作業を行っている方が数人いました。怪我をするだけでなく、感染症などの

た地域の状況を見て、私たちとは比べものにならない程の被害を受け、苦しい生活を強いられる人が大勢いることを知りました。仙台市内の機能が次第に回復していても、これらの地域では殆ど回復していない状況でした。丁度そのころ、被災地でのボランティアを行うサークルが活動を始めたため、私たちも被災地で何か役に立てることをできないかと思いい、そのサークルに参加して東松島市、亘町、山元町に行きました。サークルの参加者がとても多く、被災地の役所にも他の県からの方々が数多く参加していても驚きました。さらに、実際に自分の目で見る被災地の様子は、何度もテレビで見ているのにも関わらず大きな衝撃を受けました。

危険もあるため、少しでも知識を持つ私たちが率先して身を守り、他の人にも注意を促したいと思いました。

二つ目に、ゴミの仕分けを行いました。ゴミを集める場所に、普段家で使用されていた電化製品やタンスなどの生活用品等様々なものがポロポロな状態で運び込まれ、改めて今回の地震の恐ろしさを生々しく実感しました。また、運ぶ手段のない民家の周囲には、電化製品や泥、植物の流れ着いたゴミなどが山積みになっただけで、それらを回収するボランティアも必要だと思いました。

三つ目に交通整理です。被災地には、ただただ被災した現場を見たいだけの野次馬も少なからずいました。ただでさえ流れ着いたものやヒビが入って通れる場所が細くなっている道路を、被災者の車、またその家族物資を運んでいるトラックや自衛隊ボランティアの方々など普段よりも多い車が通ります。その道に余計な車を通すと渋滞を起こしたり、緊急時に素早く動くことができなくなってしまうのです。そのため、通行許可証を持っている車のみを通し、持っていない車の進入を止めるといふことをしなければなりません。

許可証を持っていない人、興味本位な人たちが自制して通らなければ、交通整理を行っている人員を他の活動に回すことができたはずなので、少し歯痒い思いをしました。

その他、被災地では避難所の掃除、避難所の子供達の遊び相手になったり、泥で汚れてしまった写真の洗浄、物資の仕分け、炊き出し、ボランティアの受付など様々な活動を行いました。どの活動も内容が異なり、それぞれ違った大変さ、疲れがあり

ますが、どれも欠けてはならないもので、非常にやりがいを感じることもできる活動だと思っています。

また、これらの活動の合間に現地の方々とお話しをすることができました。被災した時のお話や震災以降行ってきたこと、その他いろいろな雑談を交わしました。現地の方々は元気でとても明るく、力強く、率先して活動を行っていました。私たちが元気をもらう程でした。復興したらイチゴ狩りに遊びに行く約束もしました。活動の最後には、こちらが申し訳なくなるほど、何度も感謝をしてくれました。「頑張りましたよ」や「負けないでください」なんて言えませんでした。みなさん、もう十分すぎるほど頑張っていました。私たちの頑張りなんて到底かないません。負けるわけがありません。

機会があれば、また被災地に行きたいと思っています。臨床検査技師になったら、医療支援などこれまでとは違ったアプローチで被災地の支援を行えるかも知れません。現地の人々の足元にも及ばないけれど、頑張らなくても大丈夫になるまで、ほんの少しでも力になっていきたいです。



菅原 明
病態検査学分野 教授

新任先生のご紹介

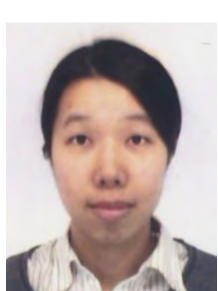
今年度、2名の先生方が本学科に就任されました。ご挨拶を頂戴いたしましたので、ご紹介させていただきます。

本年6月1日より、吉田克己先生の後任として病態検査学分野に着任致しました。出身は岩手県(盛岡一高卒)で、昭和62年の本学医学部卒でございます。本学第二内科(現：腎・高血圧・内分泌科)の内分泌グループに入局した後、本学総合診療部、本学先端再生生命科学寄附講座、宮城県立がんセンター糖尿病・内分泌代謝科を経て、今日に至っております。臨床面での専門は内科学一般、特に内分泌・高血圧・糖尿病でございます。教育面では、これまで本学医学科におきまして、様々な新規教育プロジェクトの企画・実現に関する機会に恵まれました。今後はこれらの経験を生かして、保健学科における参加型教育の充実に尽力していきたいと考えております。研究面では、これまで主として心血管病変・動脈硬化性疾患におけるホルモン核内受容体の意義や作用に焦点を当てた研究を進めて参りました。今後は、これまでの研究をさらに発展させて、生活習慣病・メタボリックシンドロームの新規の診断法・治療法の開発を進めることにより、成果を日常診療に還元して行きたいと考えております。さらに、これらの研究指導を通じて、本学保健学科学生・保健学専攻大学院生の皆さんを、本邦の医療・研究・教育の現場におけるリーダーたり得る人材に育成していきたいと考えております。何分、保健学科におきましては新参者ですので、まだまだ分からない点が多々ございます。諸先生方におかれましては、今後ともご指導の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

平成23年4月より分子血液学分野の助教に就任いたしました鈴木未来子です。平成20年に筑波大学大学院人間総合科学研究科で博士(医学)の学位を取得後、東北大学大学院医学系研究科の医化学分野(山本雅之教授)で博士研究員(平成20(21年度)、助教(平成22年度))として研究および教育に従事して参りました。星陵キャンパスに在籍していたものの、保健学科とはあまりご縁のない生活を送っていましたが、保健学科のきれいな建物と生き生きとした学生たちを見て、いつもうらやましく思っていました。この度、その保健学科の教員となることができ、非常にうれしいです。

研究面では、トランスジェニックマウスなどの遺伝子工学を得意としております。医化学分野では、赤血球分化の司令塔である転写因子GATA1がどのように制御されているのかを、緑色蛍光タンパク質を発現するマウスを作製して解析してまいりました。現在は、この技術を生かし、原がん遺伝子を発現する白血病のモデルマウスの作製に取り組んでおります。白血病モデルマウスの解析から、ヒト白血病の新しい治療法を提案することを目指して、研究を進めています。

こちらに着任して最も驚いたことは、保健学科のアウトホームな雰囲気です。教員が一人一人とコミュニケーションをとりながら学生を育てていく保健学科は、学生にとって非常にすばらしい環境だと思いました。教員としての経験がまだまだ浅い身ではありますが、保健学科の一員として努力していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。



鈴木未来子
分子血液学分野 助教

平成23年3月31日 異動
看護学専攻
小林光樹 教授
成人看護学分野 教授
↓ 栗原市立栗原中央病院 院長

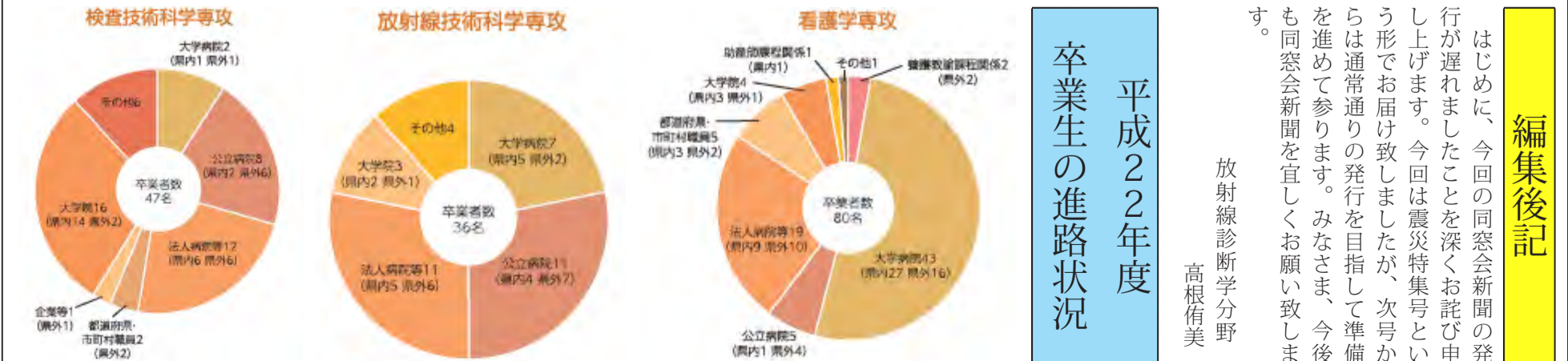
平成23年3月31日 退官
検査技術科学専攻
吉田克己 教授
病態検査学分野 教授

平成23年4月1日 着任
鈴木未来子 助教
分子血液学分野 助教

平成23年6月1日 着任
菅原明 教授
病態検査学分野 教授

人事異動

ケーションをとりながら学生を育てていく保健学科は、学生にとって非常にすばらしい環境だと思いました。教員としての経験がまだまだ浅い身ではありますが、保健学科の一員として努力していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。



編集後記